

## 3

## みんな待っているから

皆さんは、拉致問題、拉致被害者と聞いて、どんなことを思い浮かべますか？

一九七七年十一月十五日、新潟市で暮らしていた横田めぐみさんが北朝鮮に拉致されました。当時めぐみさんは十三歳。中学校でバドミントンの練習を終えた後、下校の途中を襲われた突然の出来事でした。

ずっと後になって関係者から次のような証言がありました。

「めぐみさんは激しく抵抗したため、四十時間もの間、北朝鮮に向かう船の真っ暗で寒い船倉に閉じ込められた。彼女は『お母さん、お母さん』と泣き叫び、出口や壁などあちこちを引っ掻いて苦しんでいた。北朝鮮に着いた時は、手の爪が剥がれそうになるほど血まみれだった…」

そのことを知った家族の悲しみや嘆きは、言葉では言い表せないほどでした。

これまでに政府が認定した拉致被害者は十七名。そのうち、めぐみさんを含めた十一名は未だ帰ってくる事ができていません。めぐみさんの父親の横田滋さんは、日本各地の拉致被害者の

家族とともに「北朝鮮による拉致被害者家族連絡会」を結成して長年活動されてきました。しかし、二〇二〇年六月、愛娘との再会が叶わぬまま、八十七歳でお亡くなりになりました。母親の早紀江さんも八十六歳になり、最後の力を振り絞る思いで救出を訴え続けています。他の拉致被害者の家族も高齢になり、「自分の命のあるうちに再会を」と祈りながらも、残された時間のなさや、思うように活動ができなくなっていく自分に焦りを募らせながら、一日、一日を過していらっしやいます。

「子どもを返して」と願いつづける、耐えがたい苦しみが四十五年も続いているという現実。私たちにできることは、拉致問題という決してあってはならない人権侵害を、遠い歴史上の出来事のように追いやったり、自分の生活とは関係のないことと切り捨てたりにしないことです。

横田早紀江さんは、記者会見でめぐみさんにかけた言葉をお話されたとき、「元気でいてください。みんな待っているから」とお答えになりました。拉致被害者の家族だけでなく、私たち一人一人が「みんな待っているから」という気持ちを持って、この問題を考え続けていきましょう。

では、また。

